

る實際問題を取扱つたものであつて、體系を備へた學理的研究所といふのではないが、又必ずしも學理的根柢を度外視せず、何處迄も眞摯な、學究的態度を以て論ぜられてゐる。初號に紹介せられた鹿子木氏の燃え立つ熱は無いが、強い底力の籠つた良書である。東京内外教育評論社發行、四六版、四三一頁定價圓三十錢。(尾生光三郎)

佛敎心理の研究

橘 惠 勝 著

佛敎に於ける無爲思想は直觀主義にして言詮を以て之を説明する事不可能なれども經驗主義なる有爲思想は之を自覺開發の資料として科學的方法を以て之を現代的體系に整理し學者の批判に提供せんとし現代的に佛敎の權威ある事を古典的事實に依て確證せんとする第一着手として氏は本著を公にせられたのであつた。氏先づ第一章序説に於て佛敎の無我説と外道の我論とを比較し佛敎の無我説は解脫の原理として説くものにして存在の原理として説くものにあらずその解脫思想の要點自我の觀念を構成せる因縁を心理的に觀察して觀念運動の上に常一主宰なき事を説き外界の存在も覺觀するものゝ内界の事實なりといふにあり、そして觀念運動の成立を緣起的に觀察する事は佛敎哲學の出發點なるを以て佛敎を心理的方面より研究する事は佛敎研究の基礎なりと主張して居る、次に第二章に入りて五蘊を説き五蘊皆空の理趣は佛敎の第一義なりと雖も五蘊の相續に依りて顯現する現象界ある事を否定せず現象界の作者受者が果して何物なれば不可得なれども吾人内の生活の經驗的事實に依りて有我を説くのみ、そして内部的精神

過程に生起したる直接經驗を五蘊といひ經驗の所産として外界に顯現したる觀念世界の内容を五取蘊とし五蘊と五取蘊との區別を示して居る、氏が本書最後に五取蘊なる一章を設けて「支那の學者及び傳承に泥著して心眼の盲いたる我邦の學者は五蘊の色と五取蘊の色との相異なる事をさへ知らざるは謬見の酷しきものなり」と論じて居るこの點が新研究の結果であるらしい然しその根據の今尙薄弱なるを憾む、更に進んで氏は色句義(第三章)に就て論ずる所あるも要する所只色を廣義に詮する時は法處所攝の色をも統攝して五蘊の同時的存在にありて對象の觀念を悉皆積集する義なれども十色處を積集する義なる時は相對の造色を意味するものにして感覺的内容を表示するものなりとするの外引文又引文殆ど煩はしく更に要領を得ぬ、第四章所造色を論じ所造色とは觀念世界の客觀性にして經驗の再生または創造したる一切の現象をいふものなりと定義し五根、五境、無表色の三項に別ちて引證紹介して居る、次に第五章に及んで心意識に就て稍細に之を述べて居るがつまり心意識の三は觀察の精確なる事を要求するために施設したる概念の差別なるが故に、心心所の二名も亦畢竟深遠に推求すれば義の差別にすぎずとし、佛敎の心理的觀察は學者の考察に發達の跡ある事は歴然たりと雖も大體上釋尊の創見なる五蘊の分類を體系として繼承し内省的觀察の細目に於て學者の實驗を基礎として説明を加へたるものなるが故に生理的方面の研究に於て最近の泰西の學説に及ばずと雖も論理的施設の精妙なる事は泰西の心理學者の未だ窮知せざるものなりとして佛敎の心意識論を古典のまゝ引用列示して居る、第六回心所有法に於ては心所法とは、思索

信仰のために顯現したる立場、辨證、憧憬等の現象は宇宙の萬差を執取する活動にして受想行等の三助心に推擇せられて表出、蔽識を能縁として生ずる所の轉識は可能なる機能に於てその形式に隨て現はるゝものなるが故に一貫して破るべからざる因縁の法則に隨轉する者なりとし編行、別覽、善地法、煩惱地法、隨煩惱法不定法の各項を設けて之を説明し、最後に第七章に於て五取蘊に就て五蘊との別を論じ本書を結んで居る。

氏が佛敎を心理的方面より研究せんとしたる著眼點とそして浩瀚なる佛敎諸經論より多少この心理的方面に關する章句を抜粹したのであるが然し氏が「佛敎と何等の關係なくして成立せる精神科學がそれ〳〵獨立の權威を主張する現代にありて成立科學の價値を」殆ど「全く顧慮せずして無人の曠野にて頑石に對して説法」するが如き態度を自ら捨てず「取扱ふ事實に就て一般の條理を發見して其知識を系統的に組織しなかつた事とせして」「その研究法を嚴正ならしめなかつた事とは」學者のために大なる便宜」を計らうとした氏の計劃を空しくしてしまつた様に思はれる、忌憚なくいへば本書は眞面目なる意味では決して「佛敎心理の研究」とはいへないのである、只佛敎心理に多少關係ある經論の抜粹、つまり氏が所謂「科學的研究の第一手段として研究の對象となすべき分の科的事實を」煩はしいまでに「可及的に多く蒐集」しそれに時々感想或は説明を加へたに過ぎず、佛敎心理上の語義の如き少しも咀嚼の跡なくそのまゝ書き下し引文の前後文脈の上に何等の組織、統一なく時には殆ど無關係なる引文さへ加はりそれがために全卷

の不首尾を來して居る事は大に吾人の遺憾とする所である、「現代的に佛敎の權威を確證せんとする」著述とも思はれない、然し氏がこの著に拂つた努力に對しては尠からぬ敬意を表して置く。東京、丙午出版、叢行。(本田義英)

神人論

ソロウイヨフ著
關 竹三郎譯

ソロウイヨウの名を始めて聞いたのは四五年前である。彼れが露西亞に於ける有数の思想家であることや北歐の深い神秘家であることなどに少からざる興味をそゝられた吾々にとつては、彼れの哲學の一端を覗ふべき神人論の翻譯を得たことは大なる喜びでなければならぬ。此書が彼れの全哲學體系にとつて如何なる地位を占むべきかは知らない、のみならずソロウイヨウの哲學が思想界にとつて如何なる價値を有すべきかも知らない吾々である。僅かにOswin Louieの現代露西亞哲學(一九〇五出版)やDevenioの「ワラジミル、ソロウイヨフ」等によつて彼れの素描を想見し得る吾々としては、暫く譯者の言ふ所と著者の主張する所とに従ふより外はあるまい。譯者によれば、ソロウイヨフは露國唯一の神秘論者である。神秘主義の理論家たるのみならずその實行家である彼の哲學は有機哲學、生命の哲學、全一哲學、愛の哲學である。

そして彼れは其の人格に於てトルストイと共に立ち其の思想に於てオイケンに先驅すると言ふ。著者によれば「一切」の内容は永久常住の活動的實在である。そして此活動的實在が相互活動して現實の萬物を形成する。(九二頁)この複雑なる有機體は內的に一切を包括する最高最廣の觀念である。それは絶對善であり愛の觀念